

らのイナん

#10



その薔薇の名は……編

著:藍澤たすく

イラスト:かもめ遊羽

らのけんってどんなお話??

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志^{こころ}しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。



蔵内豪三郎

本名は蔵内・マリアンヌ・葉子。華子のデビュー作まんみーのイラストを担当するイラストレーター。華子にやや危険な方向の好意を抱いている御様子(?)。



「じゃーね、華ちゃん！ また明日ねー！」

「はい、皆さんも気をつけて帰ってくださいねー」

ぶんぶんと元氣よく手を振る萌たちを、華子は笑顔で見送った。

校門の向こう側の町並みに沈んでいく夕陽が、今日も美しい。

「はい、漫研のみんなも天文部のみんなもそろそろ完全下校時刻ですからねーちゃんと帰ってくださいねーいつまでも残ってちゃだめですよー？」

「はあーい」

「うえーい」

文化部棟の他の部員達も、華子の帰宅を促す声に三々五々反応しながら帰って行く。

「よし。らのけん部室、施錠完了っとう」

華子はらのけん部室のドアノブを指差し確認して文化部棟を後にした。

「おや、白井先生、今お帰りですか？ 今日もご苦労様でしたのー」

「いえいえ、田辺さんこそお疲れさまですー」

ゴミ焼却場の側を通りかかった華子に、用務員の田辺六郎が朗らかに挨拶してくる。いかに好々爺といった、和やかで心休まる笑顔だ。

「あ、この前は文化部棟の雨樋直していたいてありがとうございますー」

「いやいや、あのぐらい朝飯前じゃよ。またいつでも言ってください」

田辺はゴミを燃やす手を休めず、ニコニコしながらそう応えた。
華子も微笑みながら会釈をしてその場を離れる。

「ん？」

旧校舎の一角に差し掛かった華子は、まだ明かりのついている教室を発見し、眉根を寄せた。
「消灯し忘れ？ それともまだ帰ってない子がいるのかしら？ まったくもお〜」

華子はつかつかと木造の旧校舎の中に入っていくと、その端にある3年6組の教室に向かっ
ていく。

「きゃっ!?」

教室に入ろうとした華子は、ちょうどそこから出てきた女生徒とぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫？」

「……こちらこそ、すみません。……先生、さようなら」

「あ、はい、気をつけて……」

伏し目がちな女生徒は眩くようにそう言って、そそくさと下駄箱の方に向かっていた。

驚くほどに肌が白く、綺麗な長い黒髪を持つ少女だった。

あまりの美しさに、華子はしばらくその後ろ姿に目を奪われていた。

「あら？」

しばらくして再び教室に目を転じた華子は、窓側の机の上に何かが置きっぱなしになっていた

る事に気がついた。

「さっきの子の忘れ物かしら？」

机に歩み寄った華子が発見したのは原稿用紙の束だった。

ちよつとざらついた感じの紙質で、その上におそらく万年筆で書かれたであろう達筆な文字
で文章がしたためられている。

「現代文の宿題……かな？」

華子は何気なくその原稿用紙を手を取った。

「!」

突然、華子は食い入るようにそれを読み始めた。

そこには大正時代を舞台にした、華族の嫡男である鳳凰院甚太郎と庶民の女学生である
東雲瑞希の、身分違いの悲恋物語が綴られていたのだ。

時代考証のしっかりした舞台背景、生き生きとした登場人物、細やかな心情描写……そして
なにより濃密な文章で練り広げられる愛憎劇に、華子の目は釘付けになった。

文字通り、時間を忘れる勢いで華子はその物語に没入していく。

そして。

「えーっ!? ここで終わりー!」

結局最後まで原稿を読んでしまった華子は、突然ぶつ切りで終わってしまった物語に絶叫す

る。
そこはちやうど甚太郎と瑞希が駆け落ちを決意して、それぞれの家を抜け出そうとするシーンだった。

「ああん、なんでこんないいところで終わりなのよう！ 続き読みたい！ 続き読みたいようー！」

華子は原稿用紙の束を抱いて、教室の中を転がり回りながら魂の叫びを迸らせた。

「あの……白井先生？ お楽しみのところ申し訳ないんじやが、そろそろここも鍵閉めますんで……」

「えっ?! あつ、はいすみませんー！」

懐中電灯片手に校内を巡回していた田辺から声をかけられた華子は、いつの間にか真っ暗になってしまった外を見て、慌てて教室から飛び出した。

みつともないとところを見られて、ぶっちやけ顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「ああくん、それにしても続き読みたいなあ……」

華子の頭の中では、甚太郎と瑞希のこれからが、限らない妄想とともに展開されていた。

二人の駆け落ちは上手くいくのかしら？ それともやっぱり旧家の因習からは逃れられずに引き戻されて、それから……。

ああん、気になるよう！ 気になるようー！

◆
華子は原稿用紙を抱きしめて、ひとり悶々とするのであった。

（あ、昨日の子!?)

放課後、萌たちとらのけん部室に向かっていた華子は、昨日3年6組で見かけた黒髪の少女を、旧校舎裏の大きな桜の樹の許に発見した。

「あの、緑川さんも青山君も先に部室行つててください！ あたしちよっと急用を思い出したので！」

「華ちゃん？」

言うが早い華子は桜の樹に向かってダッシュしていった。

「はあ、はあ……」

「?」

生徒手帳を広げてなにやら書き物をしていた黒髪の少女は、息を切らして駆け寄ってきた華子を不思議そうに見上げた。

「あの……ごめんなさい……これ、あなたのでしょうか?」

「!」

華子が靴の中から取り出した原稿用紙の束を見て、少女はハッとした表情になった。

「すぐ気がつけば良かったんだけど……ごめんなさいね〜」
申し訳なきように華子が差し出した原稿用紙の束を、少女はちよつと首を横に振りながら受け取った。

べつに気にしていません……という意思表示だろうか。

「ね、これ、貴女が書いたの？ 貴女が書いたのよね？」

華子は目をキラキラさせながら少女の横に腰を下ろした。

少女は控えめに、しかし確かに、こくと頷いた。

「すっごい面白かった！ みんなすっごい生き生きしてて、情熱に溢れて……確かに辛いお話ではあるんだけど、なんかもうすっごい引き込まれちゃって！ 特に瑞希の気持ちや丹念に描写されてるのがすっごいだよね〜、あたし読みながら何度も彼女と一緒に泣きそうになっちゃったもん！」

すっごい勢いでまくし立てる華子を、少女はただ、ただ静かに見つめている。

「ね？ これ続き、あるの？ 続き、あるの？ 書いてあるんだつたらぜひ読ませて欲しいんだけど！」

鼻息も荒く迫る華子に、少女は少し困った顔をして首を横に振った。

「続きは……ないんです……」

「え？」

少女は右手を口に当てて、申し訳なきようにうつむいた。

「どうしても、書かずにはいられなくて……ここまで書いてんですけど……ですけど……この続きは、もう……」

「そうなんだ……まだ、続きは書いてないんだ……」

少女の言葉に、華子はあからさまに落胆した。

「あれ？」

消え入るような声でまだ何やら囁き続けている少女の右手に、華子の目がいった。

「裾の所のこのボタン、とれそうだよ？」

「あ……」

「そーだ！ あたし、つけてあげる！」

「え？ ……え？」

戸惑う少女をよそに華子は靴から可愛いカエル柄がついたソーイングセットを取り出した。

「あ、このボタン自体もひび入っちゃってるね……あたしちよつど同じサイズの似たようなボタン持ってるから、これと交換していいかな？」

「……」

少女は黙ってこくと頷いた。

華子は薔薇ばらの模様が刻みつけられた銀色のボタンをはずすと、ちくちくと一生懸命針を動かして新しいボタンを取り付けた。

「うん、これでよし……っと」

華子は余った糸を糸切りハサミで丁寧ていねいに切り取ると満足そうにぼんぼんと手を叩たたいた。

「これでもう取れないと思うけど……心配だったらおうちでお母さんに見てもらってね？」

「……はい、ありがとうございます」

少女はちいさくお辞儀じぎをする。

その瞬間、華子が「いいこと思いついちゃった！」という顔になった。

そしてすぐに、ニコニコと少女に話しかける。

「ね、あなた、らのけんに入らない!？」

「らの……けん……?」

不思議そうに繰り返す少女に、華子はずい、っと顔を近づけた。

「そう！ ライトノベル研究部、略してらのけん！ あたしその顧問こもんやつてるの！ 甚太郎

と瑞希の物語の続きが思い浮かばないんだったら、みんなで協力して考えればいいんだよ！

あたしも絶対続き読みたいし！ うん、きつと楽しいよ!？」

「でも、あの続きは……」

「やっぱり、あたしだったらハッピーエンドにしてあげたいかなあ……これまでにいろんな苦労

をしてきた二人だもの。最後はしつかり笑顔で終わらせてあげたい!」

「笑顔で……」

華子の言葉に、少女は……まるで予想もしなかった事を言われたような……驚いた顔になった。続いて、安堵あんどの色と切なげな色が混じり合った複雑な表情が浮かぶ。

「二人は……幸せになっても……いいんでしようか?」

「勿論よ!」

おずおずと華子に問いかける少女に、華子は(薄い)胸を張って即答する。

少女は華子のあまりの勢いに、くすりと小さな笑みを浮かべた。

「あ、でも、安易なハッピーエンドはだめだよ? やっぱり運命しやうめいに翻弄ほんろうされながらも、果敢かかんに立ち向かってきた二人なんだもの。これからもそれなりの障壁しょうへきを力を合わせて乗り越えて、それでもって最後には人里離れた小さな教会で……って、あれ?」

そこまで言って華子は突然目の前の少女の姿が消えていることに気がついた。

「どこ行っちゃんだろ……」

「やあ、こんにちは、白井先生。ひなたはほっこですか? 最近いい陽気になってきましたからのおく確かにここは最高の場所ですなあ」

スコップとバケツを持った田辺がニコニコと華子に話しかけてきた。

「あ、あの、田辺さん、女の子見ませんでした? さっきまでここにいたんですけど……あの、

3年6組の……」

「6組？ 3年は5組までしかありませんぞ？」

「え？」

田辺の不思議そうな返事に、華子は動きを止めた。

5組までしかない？

そんな、馬鹿な……だって昨日、確かに6組の教室であの子を……。

「ほう、白井先生、めずらしい物をお持ちですな」

田辺は華子の手に行っているボタンを興味深げに覗き込んだ。

「これはあれですな、またこの学校が女学校だった頃の……大正時代の制服のボタンですな……うちの母親と祖母がここに通っておりましたので、よく覚えとりますじや」

「え？ え？」

ひびの入ったボタンを愛おしそうに眺める田辺の姿に、華子はますます困惑を深めていく。

「だ、だって、さっきまで確かに、ここに……」

言い掛けて華子は、自分が指さした桜の樹の根元に、古びた生徒手帳が落ちている事に気がついた。

「あの子のかわ……」

華子はそっと生徒手帳を拾った。

「ほはおく、これもまた珍しい。これは祖母の時代の生徒手帳ですな。ほら、裏表紙にそのボタンと同じ薔薇の模様があるでしょう？ これがこの頃の校章だったんですじや」

田辺がまた興味深げに華子の手許を覗いてくる。

「しかしそんな物がなんでこんなところに落ちてるんですかいのおく？」

首をひねる田辺をよそに、華子は震える手でそっと退色しきった生徒手帳のカバーをひらいた。

そこには……。

【三年六組 東雲瑞希】

あの物語の中で見慣れた名前が、見慣れた万年筆の筆致で綴られていたのだった。

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- GA文庫マガジン7月24日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン9月合併配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン10月27日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン11月27日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン12月25日配信号…らのけん！
- 2 夢の最終選考編
 3 はじめてのおつか…うちあわせ編
 4 思い切って告白しちゃうぞ編
 5 ペット攻めたり編

★2015年

- GA文庫マガジン1月22日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン2月26日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン3月26日配信号…らのけん！
 GA文庫マガジン4月24日配信号…らのけん！
- 6 はじめての発売日編
 7 かんこれ、始めました編
 8 MISA O STRIKE BACK! 編
 9 はじめての「あいさつ」編